



## 海のゆりかご通信

No. 34 Sep 2012

### イベント リポート I

伊江環境・生態系保全活動組織

イベントリポート1・・・伊江環境・生態系保全活動組織  
お知らせ・・・「ひとうみ」バンダナについて  
イベントリポート2・・・米ヶ脇里海を守る会  
お知らせ・・・里海サポーターの派遣について

7月20日、沖縄県の伊江島で、漁師と地元小学生によるサンゴの保全活動が行われた。参加した小学生は伊江島にある2つの小学校(伊江小学校と西小学校)の6年生52名。集合時間になり、港の浮き桟橋に勢いよく集まった小学生たちは、6年生ということもあって、たくましく、そして少し大人びて見えた。午前中に1学期の修業式が終わり、明日から夏休みということもあってか皆晴れやかな顔をしている。天気は上々で、コバルトブルーの海に南国の太陽の光が燦々と降り注いでいた。

\* \* \* \* \*



この日行われた活動は、サンゴ種苗の移植とタマン(ハマフエフキ)の放流、そしてグラスボートによる水中観察。人数が多かったので3班に分かれてこれらを交代で体験した。

サンゴの移植は、港の岸壁から500mほど沖合いのイノー(リーフ)のなかの浅瀬で行われた。浅瀬までは漁船からカヌーに乗り継いで渡る。これには小学生たちも大人も大はしゃぎだったが、カヌーを使ったのは船が入れない水深であることと、既存のサンゴを踏み荒らさないため、そして6年生たちの安全を考慮して

のこと。移植に用いるサンゴ種苗は同県の阿嘉島(あかじま)にある研究施設で卵から1年間かけて生産されたもの(有性生殖)で大変貴重なものだ。浅瀬に渡った6年生たちは、専門家のアドバイスのもと、サンゴ種苗が付いた小さなブロックを水中ボンドで海底に固定する作業を真剣に行っていた。



\* \* \* \* \*

一方、タマンを放流するグループには、伊江漁協組合長であり活動グループ「伊江環境・生態系保全活動組織」の代表でもある八前(はちまえ)さんが、漁師たちがサンゴの保全活動を行う理由や保全活動の内容をレクチャーした。

八前さん、「伊江島はサンゴに囲まれ、所々に海草の仲間のリュウキュウスガモが生えています。サンゴやリュウキュウスガモが何で大事なかわかりますか？

|  |       |                     |
|--|-------|---------------------|
|  | 活動組織名 | 伊江・環境生態系保全活動組織      |
|  | 都道府県  | 沖縄県                 |
|  | 地域協議会 | 沖縄県環境・生態系保全対策地域協議会  |
|  | 協定市町村 | 伊江村                 |
|  | 構成員数  | 108名                |
|  | 対象資源  | サンゴ礁                |
|  | 活動内容  | 食害生物の除去、浮遊・堆積物の除去など |

グラスボートに乗ってわかったと思うけど、サンゴが無いところには魚はいないけど、このような浮き桟橋でもサンゴが付いていると魚が集まってくるよね？サンゴは、これからみんなで放流するタマンなどの魚や貝などの大事な棲み家。そしてタマンは伊江島の漁師さんにとっても大事な魚です。リュウキュウスガモがジュゴンの餌であることはみんな知ってるよね？」

「でも伊江島の周辺ではサンゴが多いところもあるけれども、過去の白化現象で少なくなったままのところがあります。サンゴを増やし、魚を守るために漁師でもできることがあるのではないかと考え、このような保全活動をしています。」



少し詳しく言うと、伊江島の周辺海域では、東のイノー（リーフ）の縁や北部の海岸などに高密度のサンゴ分布域があるが、伊江港周辺の南側のリーフは 1998 年と 2001 年に起きた白化現象の被害が未だに尾を引いて、サンゴの回復が遅れている。八前さんたちのグループは定期的にこれらの海域をモニタリングし、オニヒトデの除去や浮遊ゴミを回収する活動を行っている。そして海に潜ったときにはサンゴが着生しやすいように岩盤をブラシで磨いたりもしている。

「それでは、わかったところで1列に並んでみんなでタマンを放流しましょう。ところで放流するときはなんて言う？おいしくなあれ？それとも大きなあれ？」

6 年生、「大きなあれ・・・。」

この日用意されたタマンは沖縄県栽培漁業センターで種苗生産されたもの。まるで家族のような八前さんと 6 年生たちのコミカルで他愛のない会話の中、バケツに小分けにされたタマンの稚魚が伊江島の海に放流された。

「大きな一れ！」

\* \* \* \*



ところで伊江島の小学生たちは海のことをどれくらい知っているのだろうか。今回のイベントにご協力いただいた伊江小学校の玉城校長先生が最後にこんなお話をしてくれた。

「子ども達は陸からの環境についてはかなり勉強していますが、海の中については今日が初めてです。ですから今日のことは一生の思い出になると思います。ただ、今の海は、私が小学生だった 40 年前の海とは全然違います。陸から見る海は変わっていませんが、海の中は大きく変わり、サンゴが少なくなりました。6 年生の皆さんには、伊江島のこの環境の中でサンゴがどういう役割を果たしているのか、今から勉強して行ってほしいと思います。」

「来年も是非お願いします」という校長先生の言葉に苦笑いしておどける八前さん。ここ伊江島では環境・生態系保全活動が島人の取り組みとしてしっかりと根を張っているようにみえた。

(JF 全漁連 関根寛)

## おしらせ 「ひとつみバンドナ」について

JF 全漁連では、全国の活動組織による地域の皆さんへの普及啓発活動をお手伝いしています。その際の普及啓発グッズとして、海藻をモチーフにした「ひとつみバンドナ」を製作、学生や一般の方々に配布しご好評いただいております。今後、活動組織や里海を保全する活動をされているグループにおいて、普及啓発活動(イベント)等を開催される予定の方々にお分けいたします。数に限りがありますのでご連絡はお早めに。







7月29日(日)、福井県坂井市で「米ヶ脇里海を守る会」が地元の小学生を集め、「里海を守るレンジャー体験」が開催された。朝から炎天下、親子36人が水中メガネやバケツを手に歓声を上げながら元気に海に入り、多くの種類の海藻や水生生物と触れ合った。

現場指揮を執るのは、地元の沿岸漁業を営む漁師、守る会メンバーの松田泰明さん。

海での体験会は、朝の9時半から11時までの約1時間30分。まずは、膝までの浅い場所から観察をスタートし、やがて子供たちが水に慣れたのを見計らい、続いて背の丈ほどの深さの藻場まで移動する。自然に、無理なく声をかけながら、集団を誘導していく。松田さんは、声がよくとおる。そして、常に語りかけ続ける。適切な誘導と、暖かい心配りが言葉となって、次々と発せられる。現場での十分な経験と判断力を感じさせる、頼もしい兄貴分だ。スタッフ数名が、子供達の輪の中で生き物の説明をし、そして外側周辺でさりげなく安全確認と誘導を行う。チームワークだ。



「はい、いったん集合！ 今から生き物の説明をします。これはみんな知っているよね、サザエ。これは

バフンウニ、食べると最高。ベッコウガサは傘みたいな形。この海藻はホンダワラ、それに、ミル。このノリ場では、ハバノリが穫れるぞー。」「はい、じゃ、説明終わったからみんな海に戻せー。体冷えちゃった人は、あそこの砂浜で腹ばいになって、お腹を温めなー。」松田さんが、次々と子供たちに号令をかける。



\* \* \* \* \*

守る会では、地元の海女やサーファーが参加し、日頃は藻場づくりや海浜清掃・植樹、そして普及啓発活動を行っている。名勝「東尋坊」から歩いていける距離に、活動の場(藻場や海岸)がある。そして、そのすぐ隣が、三国海水浴場だ。この立地を活かし、代表の大井七世美さんは、漁協所属の海女としてサザエやワカメなどを水揚げするかたわら、サーフショップ Nan's Sea を主宰する。地元サーファーや、海のレジャー

|  |       |                      |
|--|-------|----------------------|
|  | 活動組織名 | 米ヶ脇里海を守る会            |
|  | 都道府県  | 福井県                  |
|  | 地域協議会 | 福井県環境・生態系保全対策地域協議会   |
|  | 協定市町村 | 坂井市                  |
|  | 構成員数  | 349名                 |
|  | 対象資源  | 藻場                   |
|  | 活動内容  | 岩盤清掃、岩おこし、浮遊堆積物の除去など |

で三国の浜を訪れる人々を迎え、その交流の中心にいる。海を愛する気持ち、人への思いやりが雰囲気滲み出ている。アカモク、ホンダワラ、モズク、ウミウチワ、多種多彩な海藻が根付く海のゆりかごに、ムラサキウニ、オオコシダカガンガラ、レイシガイ、さまざまな生き物が息づいている。大井さんが、自ら海に潜りながら、とりまく子供達に、実に優しくフランクな語り口で生き物の説明をしている。



\* \* \* \* \*

守る会の主な活動の一つに、藻場造成のための海底“岩おこし”がある。漁明け、番屋でくつろぐ漁師さんに話を聞くと、海水浴場の近くに堤防が出来たせいか、漁場の岩場に砂が流れてくるようになったとのこと。その砂が、海底のゴロタ石に積もる。そのままにしておけば、岩に付着して育つ海藻が根を張れなくなる。ワカメが穫れなくなり、アワビやサザエの餌場が失われてしまう。こうした事態を防ぐため、そこを生業の場とする海女さんが、海底に潜って、一抱えもある石の一つ一つを手でひっくり返していく。潜水のプロであっても、この作業は重労働だ。しかし、米ヶ脇の里海を守る想いは強い。コツコツと、地道な作業を丹念にこなしていく。こうした作業は、海の中で行われていて、普段私たちが目にすることは出来ない。体験会を通して、海女さんをはじめとする里海を守る人々がいること、そして、海の中で起きている出来事を知ってもらいたい、それが、このイベントの大切な目的の一つでもある。

\* \* \* \* \*

11時過ぎ、松田さんから上陸の号令がかかった。近くの区民会館に徒歩集合。まず、ピリッと生姜を絞った飴湯の冷ましがふるまわれる。甘く優しい、ふるさとの味。そして、“七世美謹製粉ワカメ”まぶしごはんのおむすびに、メカブのお味噌汁。太陽に照らされたカ

ラダに粉ワカメの磯塩味がちょうど良い塩梅で、おむすびの大皿に何本もおかわりの手が伸びた。磯ベッコウガサの塩ゆでも出た。食べ終わったら、殻を積み上げる遊びが松田さんから伝授される。米ヶ脇の海ガキ養成講座のようだ。



午後の部では、海底の映像をスクリーンで上映し、講習会が行われた。より深い場所を専門家らが撮影したものだ。よりディープな場所とその環境・生態系を、松田さんが子供達に伝授していく。暗室で子供たちの目が光る。米ヶ脇の海を守る“里海レンジャー”の誕生の瞬間だ。

10年、20年後、彼ら、彼女らは、大人になって、さまざまな立場におかれるだろう。米ヶ脇の里海をととしたそのアタマとカラダで考え、行動してほしいと願う。

(JF 全漁連 田中要範)

## おしらせ

### 里海サポーターの派遣について

JF 全漁連では、「環境・生態系保全活動支援推進事業」の一環として、藻場や干潟などの専門家「里海サポーター」を派遣し、活動組織の技術的、事務的な悩みにお答えしています。サポーターは大学、研究機関、民間会社などから約 60 名が登録されており、活動組織からお声がかかるのをお待ちしております。是非ご活用ください。



#### <お問い合わせ>

JF 全漁連 漁政部 環境・生態系チーム  
Mail : k-support@zengyoren.jf.net.ne.jp  
TEL:03-3294-9616 FAX:03-3294-9658

海のゆりかご通信第 34 号 発行：J F 全漁連  
環境・生態系保全活動支援推進事業（水産庁補助事業）